

学期レポート 2010 年春学期

日本財団聴覚障害者海外奨学金事業
第4期生 武田 太一

春学期クラスについて

先の秋学期に続いて、春学期もオーロニ大学にて受講した。今学期は以下の4クラスである。

- ・ DEAF189B (3単位) 聴覚障害学生クラス 英語リーディング
- ・ ENG101A (4単位) 一般クラス 英語ライティング
- ・ ESL191 (3単位) ESL クラス 英文法・編集クラス
- ・ ASL161 (2単位) アメリカ手話クラス フィールドワーク

今回は12単位ぴったり受講した。リーディングクラスとライティングクラスは受講することを前から考えていた。ESLクラスは秋学期でENG151Bを受講した際、教授から進められたので受講することにした。残りの2単位を埋めるためにどのクラスを受講するか悩んだが、アメリカ手話に関するクラスを受講しておきたいと思い、カウンセラーや教授と相談した結果、フィールドワークを取ることに決めた。

聴覚障害学生クラス 英語リーディング

秋学期でも受講したクラスの続きである。カウンセラーからは、このクラスを受講する必要はないと言われていたが、他に先生とダイレクトにコミュニケーションが取れるクラスがないというため、このクラスを受講することにした。受講生たちは半分が自分と同じように秋学期から継続して受講している人もいれば、新しい顔ぶれも見られた。教室も以前の少し暗くて机の移動も毎回しなければならなかったのに対し、今回の教室は明るいところであった。しかし狭くて肌寒いなどマイナス面もあり、改めて勉強環境の大切さも感じた。

本を読む際、1つのエッセイが長かったりすると、読む前からやる気をなくしてしまうかもしれない。しかしこのクラスでこういった問題を解決するために、本を読むテクニックをいくつか教わった。このエッセイにはどのテーマを取り上げているのか、どんな構成で書かれているのかなど見つけ出す方法として、「タイトル」「序文の最後にある主題文(シーシスセンテンス)」「それぞれの段落の始めにある話題文(トピックセンテンス)」に注目するなどがある。特に主題文には例えば、高校を卒業したら働きに出る人と大学に入る人に分かれる、とあればこれから述べる内容が働きに出る人についてと大学に入る人について述べるだろうということが判断できる。このようなポイントをつかむことで、このエッセイは何について書かれているか想像しやすく、読むのがスムーズになる。

先の秋学期では渡米したばかりで自分の勉強スタイルがなかなか定まらない状況であったが、今回はその反省を生かし予習をしておく、課題を期日までこなすなどやるべきことをちゃんとやれるようになった。しかし、いざテストになるとクラス内で学んだ内容であるのに、思い出せないなど問題も浮き彫りになってきた。そのため、最終的な評価は芳しくなかったが、このクラスで得たテクニックは今後にも生かしていきたい。

一般クラス 英語ライティング

ENG101A といっても全部で10クラス程あり、それぞれ指導教授が異なる。なるべく良い教授のところを受講したいので、カウンセラーに教授の評価を聞いたり、コーディネーターに手話通訳のしやすさを確認したりするなどいろいろ考えてクラスを決めた。

教授は現在の社会問題を話題にいろんな話しをするのが好きな女性で、時々話が脱線することもあったが、それでも面白く聞くことが出来た。映画も好きなようで、このクラスで出されたエッセイの課題はほとんど、クラス中で見た映画を分析するものであった。これまでに観た映画は「ボウリングフォーコロムバイン(Bowling for Columbine)」「許されざる者(Unforgiven)」「バッドアス!(BADASSSSS!)」である。クラス中に英語字幕で観たのだが、英語の口語表現に慣れていないため内容を掴むのが難しかった。自分もDVDを購入

入して自宅で繰り返し観る、日本でも上映されたことがあるものはインターネットで探してあらすじを読むなどをして、映画の内容が理解してきた。いずれもアメリカにおける社会問題を反映したものであるため、これらのエッセイを書くことによってアメリカで起こっている問題を垣間見ることができた。

このクラスで残念なことは2つあり、1つはエッセイの書き直しが出来ないことである。秋学期のときは1度出したエッセイで不十分な点があれば書き直したものを再提出することができ、評価を上げることが出来た。しかしこのクラスではそれが認められず、手厳しかった。もう1つは手話通訳の問題があり、手話通訳者が使う手話が英語対応に近いので、なかなか読み取れない。コーディネーターにお願いして手話通訳者を変えてもらいたいと要望したのだが、近年の財政難により手話通訳者が不足しており、簡単には変えられないこと。結局手話通訳者は変わらないまま学期が終わった。教授の話を知りたくても、手話通訳の質によって意欲が落ちたりするなど問題が起こることを実感した。また自分で手話通訳者と直接話し合いをするべきであったなど後悔もある。

ESLクラス 英文法・編集クラス

ESLとは英語が第二言語 (English as a Second Language) の意味であり、留学生あるいは移民のために設けられているクラスである。秋学期で文法に問題があるため、教授から奨励されたクラスである。このクラスの担当教授はアメリカ手話が少し出来る人であったため、コミュニケーションが取りやすかった。

実際に受けてみると自分のレベルに合ったクラスである。このクラスでは教科書を通して英文法を学び、自分が書いたエッセイを読み返して文法の誤りなどを見つけて編集するということを学んだ。自分の場合は、文章と文章のつながりが崩れていたり、動詞の時制や単数・複数形が誤っていたりなど特徴が見られ、その部分を特に注意しながら課題をこなしてきた。教授に何度も確認してもらえるので、英語の力がつけやすいクラスであった。自分のレベルに合わせてクラスを受講することも大切ということも学んだ。

このクラスは一般クラスでもあるため、手話通訳者を配置しての受講であった。英文法が中心となるため、例えば単数形や複数形の違いなどを手話で表現する際もあえて指文字にすることで分かりやすくしてもらった。日本手話もそうであるが、すべての英単語に応じたアメリカ手話があるわけではないので、例えば「説明する」にあたる英単語は「describe」「explain」などがあるがアメリカ手話ではどれも同じになってしまうため、どの単語を出したのか分からないときもたびたびあった。手話通訳者との確認作業が大変ではあったが、あらためて英語とアメリカ手話の違いが実感できたクラスである。

アメリカ手話クラス フィールドワーク

ASL103の次は104を受講するのが妥当ではあるが、3時間の講義を週に2回も受講するのは疲れるため、アメリカ手話を実践できるフィールドワークを受講することにした。このクラスではフリーモントろう学校にてボランティア活動を行うことで単位認定となる。自分は幼稚部あるいは小学部のろう重複児の就学支援について学びたいので、ろう学校へのボランティア申請の際、要望として加えた。その結果、小学部1年の重複 (スペシャルニーズ) クラスを担当することになった。

先生1人、アシスタント1人、生徒4人のクラスで毎回いろんなことを勉強させてもらった。生徒それぞれが有している障害名についての説明はなかったが、自閉症を含む発達障害を有していると思われる。算数の授業で1~20まで数えられるのに生徒がいるのに対し1~5までしか数えられない、国語の授業で英文を読んで内容を理解できる生徒もいれば、単語レベルでしか理解できないなど個人差があった。このため、4人まとめて指導する、個別に指導するなど状況に合わせて授業を進めていく必要がある。

最初の頃は生徒たちになかなか顔や名前を覚えてもらうことが出来ず、次の週に生徒たちに会っても初めましてという感じであったが、毎週来るたびに生徒たちに覚えてもらうことができ、いろいろ話しかけてくれるようになった。個別指導の際は1対1で指導するのだが、他の生徒が先生と話をしているのが気になって課題に集中できない時は、あえて場所を移動するなど工夫をしてきた。先生ともろう重複児への指導の際に、役に立つ教材を教えてもらったりなど情報交換をしたり、どんな指導方法がいいか話し合ったりなど良い経験をさせていただいたクラスであった。

大学院出願準備

先の秋学期の途中から大学院進学準備を進めてきたのだが、この春学期より本格的になってきた。自分の留学テーマが「ろう重複児・者への支援」であるため、それが学べるプログラムがある大学院はどこか探す、それぞれの大学院に問い合わせをする、出願に必要なものを確認するなど情報収集に努めた。教育面で支援していくのか、生活面で支援していくのかさまざまな見方があり、教育学部やリハビリテーション学部などが挙げられたが、日本で活かすことを考えて教育面に絞ることにした。その結果、いくつかの大学院が候補に上がり、出願を進めてきた。

大学院出願にあたって、留学生は GRE や TOEFL などの英語試験の成績提出が求められるため、1月に GRE の受験、3月に TOEFL の試験を受けた。これらの試験を受けるため、GRE と TOEFL を同時に出願したにも関わらず、GRE だけが先に受理され、TOEFL がなかなか受理されない状況であったため、大学院の出願締め切り間に合わない状況になった。カウンセラーと相談し、TOEFL の受験が遅れているので英語試験の成績の提出が遅れるという事情を述べる手紙を作ってもらい、それぞれの大学院に提出したところ、いずれも快く待っていただくことが出来た。良い結果が届くのを心待ちしながら春学期が終了した。

出会いと別れ

アメリカの大学は秋学期（8-9月）から始まるのが多いため、秋学期からの入学が基本ではあるが、春学期から入学してくる人もいる。ろう・難聴の留学生も例外ではなく、この春学期に台湾、韓国、タンザニアからそれぞれ迎えた。留学生同士であると、アメリカ生活への不安や希望が似通っているので仲良くなりやすい。大学生活を堪能しながら、一緒に遊んだり会話に花を咲かせたりなど楽しく過ごした。その一方でアメリカでのインターンシップを終え帰国する日本人友人との別れもあった。いずれにしても、出会う喜びや別れの悲しみなど様々な感情が巡る時期であった。